

ヘーゲル論理学における「物自体」概念の深化について

北海道大学 安保広睦

はじめに

ヘーゲルは『大論理学』のなかで、「論理学は、物自体とは実のところなんであるか、ほんとうに自体的にあるのはなにか、ということについての叙述である」(W5, 130)と書いており、ヘーゲル論理学全体の目的が、まさしく「物自体」に象徴される自体的なものの解明に当てられていることはけっして看過されてはならない事実であろうと考える。「物自体 Ding an sich」とは、「われわれはそれを認識することができない」という前提とともにカント哲学が残した問題含みの概念であって、また同時に、それは経験の内部にある「現象 Erscheinung」と明確に区別されることによって、「経験の限界を画定する」というカントの理性批判の試みにおける最大の目的を充実させるのに必要不可欠な概念であった。本稿では、ヘーゲル論理学がこの「物自体」の問題に対していかに応答しているか、ということについて検討したい。

現在、英語圏のヘーゲル論理学研究においては、大きくふたつの解釈が対立している⁽¹⁾。ヘーゲル論理学の基本的性格とはなんであるかをめぐる、Stern に代表される形而上学・存在論的解釈と、Pippin に代表される非形而上学・認識論的解釈である。私見によれば、ヘーゲル論理学研究におけるこのふたつの解釈の対立は、すべて解釈者自身によるカントの超越論的観念論に対する理解の相違にもとづいている。あえて換言すれば、ヘーゲル研究上の対立は、「心と世界との関係」という伝統的な哲学の議論がヘーゲル解釈の内部で反響しているにすぎないものと思われる。これをカントに引きつけて考えるなら、われわれは有名な「現象と物自体との区別」の問題に行き着くことになる。物自体を認識することができないという事態は、そのまま心がいかにして世界に到達するかという問題に関わってくるものだからである。

このヘーゲル論理学研究上の対立を足掛かりにして、ヘーゲル自身が「物自体」をいかにして理解していたかということを検討していきたい。まずは上にあげたヘーゲル研究上の対立の具体的様相を確認し、その対立の原因に、確かに「物自体」概念が見いだせるということを示そう。その後、ヘーゲル自身の「物自体」理解を『大論理学』等にある記述をもとにして検討し、ふたつの解釈の対立を解消することをめざす。

1. ヘーゲル論理学解釈におけるふたつの道

現在の、特に英語圏におけるヘーゲル論理学解釈にはふたつの道がある。

ひとつは Terry Pinkard や Robert Pippin に代表される非形而上学的解釈であり、とくに Pippin はヘーゲルをカントの正統な後継者として位置づける。

「彼〔ヘーゲル〕の概念に関する理論、そして実際、概念と実在との関係、あるいは彼の哲学全体の基本的な立場は、きわめて重要なカント的主題である「統覚の超越論的統一」をもとにした直接的なバリエーションである」と理解されるべきだ」(Pippin 1989, 6) という主張が物語るのは、ヘーゲルはカント以後にあって、カントの重大な発見である「超越論的統覚」を受け入れ、そのような自己意識にもとづいて、ヘーゲル自身の論理学を展開しているということである。

この解釈には、Stephen Houlgate や Robert Stern などの形而上学的解釈が対立する。それによると、Pippin などによる非形而上学的解釈は、ヘーゲル論理学を「半分しか語って」おらず、それというの、「ヘーゲル論理学において探究されたカテゴリーは、思惟の必然的な概念と、存在それ自体の本質的な規定のいずれも」(Houlgate 2008, 118) であって、彼の論理学は論理学であると同時に「形而上学あるいは存在論」でもあるからである。Pippin らの解釈ではヘーゲルのテキストにみられる「非超越論的」な側面を見落とすことになるが、しかしヘーゲルはむしろ「存在それ自体」ではなく、自己意識の条件をもとにした方法へのいかなる形而上学のカント的制限をも拒絶している」(Stern 2008, 141) ように思われるため、「存在論」的側面の見落としは致命的であるというのである。

もちろん、カント哲学を正確に読み解けば、Stern らの指摘に反して、Pippin の解釈が十分に「存在論」的でもありうることは明らかである。たしかに物自体は認識されえないのだが、認識されうる現象はまったく客観的であり、その客観的実在については、カテゴリーの超越論的演繹によってカテゴリーの客観的妥当性が担保されることに伴い、完全に保証されている。その意味で、カントにとって「存在論という高慢な名前」は「たんなる純粹悟性の分析論という謙虚な名前に席を譲らねばならない」(A247/B303) のであって、彼の「超越論的論理学」に含まれる「超越論的分析論」こそまさに「存在論」の謂いである⁽²⁾。かのカテゴリーの超越論的演繹において、中心的な役割を果たすのが「私は考える」という純粹統覚による「自己意識の超越論的統一」(B132) なのであり、その根源的統一の機能にもとづいて客観的実在が保証されているのだから、Pippin が主張するように、ヘーゲルがカントの「超越論的統覚」を完全に受容しているとすれば、ヘーゲル論理学が「存在論」でもあるということは疑いえないはずである。

その点について、形而上学的解釈の立場をとる Stern は、たしかに Pippin は「正確にもカント的な視点から、[自己意識と存在それ自体という] 区別はないというのが完全な見解であり、その見解ゆえにヘーゲルは彼の形而上学を、超越論的なしかたで、自己意識の必然的な諸条件から主張することによって導いていくということに満足しえたのだと応答するかもしれない」(Stern 2008, 141) と述べ、当該の問題意識を共有している。その上で、「根本的な心と世界の二分法がほんとうに意味のないものであるなら」、そうであればなおさら、「なぜカテゴリーに関する探究を、自己意識の条件に関する探究とみなすのか、そしてまたなぜ研究の「基礎」として(「存在」ではなく)「わたし」を扱うのか」(ibid.) と問い、ヘーゲルのテキストすべてを超越論的なしかたで、すなわち自己意識からの基礎づけというしかたで論じること疑義を呈している。

このように Pippin はヘーゲルの存在論的な議論を無視していると批判され、逆に Stern らはヘーゲルの認識論的な議論を無視していると批判されるので、「この論争は結局は、ヘーゲルの文言をどう捉えるかという水掛け論になってしまう」(川瀬 2021, 57) のである。結局のところ、ヘーゲルのテキストは存在論的－認識論的解釈のいずれをも許容する表現をとっているのであり、ゆえにここで問題となるべき射程は、すでにヘーゲル解釈における表層的対立にとどまらず、むしろヘーゲルをめぐるこれらふたつの解釈をそもそも可能にしているところの、より深奥の哲学的課題へと続いているように思われる。

2. なぜ「物自体」が問題となるのか

問題を整理してみよう。ふたつの解釈は、少なくともヘーゲルがカントの「超越論的統覚」を受け入れ、それがために「自己意識と存在それ自体という区別」がすでに存在していないということを認めているように思われる。前述のとおり、Stern はカントの超越論的な批判によって「根本的な心と世界の二分法がほんとうに意味のないもの」となっていることを受け入れた上で、みずからの疑念を提示しており、またヘーゲルが「ポスト・カント主義者であることについては同意」(Stern 2008, 141) しているからである⁽³⁾。

そうであるならば、真に Stern らが受け入れられないものはなんであろうか。思うに、ヘーゲルが受容したはずのカントの「超越論的観念論」では、形而上学的解釈の立場をとる Stern や Houlgate は、これを「存在論」として満足できないのである。そのわけは、以下の Stern 自身の言葉をみれば理解に易い。

Pippin によれば、ヘーゲルはカント的な批判的転回に従っており、そう

して統一された自己意識（カントでいうところの「統覚」）の条件にもとづいて、概念体系のために必要なカテゴリーを規定しようとする。しかしながら、カントはわれわれの概念的枠組みの外側にありうる「物自体」の実在論的概念の余地を許すことによって、みずからの主張を弱めているのであって、Pippin はそのような可能性を閉ざすような、より徹底した反実在論を発展させたものとして、ヘーゲルのプロジェクトをとらえている。(Stern 2008, 138)

Stern の解釈によると、たとえ Pippin の言うようにヘーゲルがカントの「統覚」を受けいれていることを認めたとしても、その体系にカントの残した「物自体」という「実在論的概念」がある以上、自己意識とその外側という隔絶が必ず生まれるのであり、その結果、一度受け入れたはずの「自己意識と存在それ自体」という区別がすでに存在していない」ということを、ここに至ってふたたび棄却せざるを得ない。このとき、Stern はカントの物自体概念を「実在論的」ととらえており、それにわれわれが到達しえないという点をとって、カントの超越論的観念論は「存在論」として不十分であるとする。そしてヘーゲル論理学をそこからむしろ「より徹底した反実在論」のほうへと引き寄せて規定する Pippin の解釈を断固として拒絶するのである。

しかしカントにおける「物自体」という概念自体があまりにも多義的であり、それに関する解釈も一定せず、いまだにその本義が見定められていない以上、ここでの Stern による「実在論的概念」としての物自体という規定もまた、おそらく自明ではない。実際、Pippin がそのような理解をもっていたかどうかには疑問の余地が残る。Pippin は「物自体」を「超越論的－懷疑論的残余」(Pippin 1989, 93) と呼び、カントーフィヒテが陥ったとされる「人間的知覚と神的知覚との基本的な、永遠の相違を強調し、後者に唯一の真正な、物自体の絶対知を帰属させる」という「超越論的懷疑論」をいかに回避するかということがヘーゲルの課題であったと主張する (ibid.)。そして「ヘーゲルがカントの「物自体」理論を攻撃する文脈において明らかだが、ヘーゲルはわれわれがたんに超越論的条件から独立している世界それ自体を知ることができる」と主張しているのではなく、それ自体についての主観の知識は最終的に、正確に理解すれば、カントが逆説的に否定した物自体の知識として考えられるということを主張している」(ibid., 98) ののであって、「存在それ自体」についての「実在論的前提」を「無効化しようとする」こと (ibid.) がヘーゲルの目指すところであり、その意味で、「ヘーゲルは、直接に実在論的方法において、たんに精神の自己規定と存在それ自体との同一性を打ちた

てようとしたのではない」(ibid., 97) と考える。つまり Pippin は、Stern が言うように、「物自体」が「実在論的概念」であるため、これを徹底的に排除することによって、カントーヘーゲル理論を「反実在論」的に規定しようとしたのではない。そうではなく、「カントがわれわれは物自体を知りえないということの虜になった」(ibid.) という事実をあくまで「実在論的」に乗り越えようとするいかなる試みをも無効化しようとしたのである。「物自体を知りえない」という事実から、われわれの認識を超えた「なにか」がたしかに実在していると考えのではなく、少なくともわれわれの認識に対してたしかに設けられた「制限」(ibid., 91) が存在していると考えるのが、Pippin による「物自体」理解の核心であったように思われる。

ここにきて、次のことが明らかになるだろう。すなわち、カントの残した「物自体」概念があることによって、ここで、カントの理論的枠組みの後継者としてヘーゲルを解釈しようとする者の眼前には、大きくふたつの道がひらけているはずである。ひとつには、「物自体」をみずから「実在論的概念」ととらえるために、われわれのカテゴリーによっては到達しえない「物自体」というものが実在論的にあると考え、しかしカントの超越論的観念論によってはどうしてもこれをとらえることができないので、ゆえにその体系は「存在論」としては不十分であり、これを受けいれながらさらに克服していくものとしてヘーゲル論理学を解釈することは、主観的な「わたし」から始めて、客観的な「物自体」をどうにか「主観」の側に取りこむことで乗り越えようとする「反実在論」であるかぎりにおいて、これを認めることができない。ヘーゲルが「超越論的統覚」を受けいれていたことは一旦認めるが、この成果を受けいれることは必然的に、統覚とはどこまでも異質な、しかし体系において不可欠である「物自体」を受けいれることを意味するかぎり、ヘーゲル論理学をその主観的な「自己意識」から始めることに同意しないのである。それに対してみずからはなにかしらの「実在論」をヘーゲルに帰し、たとえば自己意識からの基礎づけではなく、「存在それ自体」から始めるというしかたによって「存在論的」にこれを解釈しようとするのが Stern らのとった道である。

その一方、「物自体」をわれわれの「概念＝世界」に対するたんなる「制限」ととらえるために、これをあくまで「実在論的」ととらえ乗り越えようとして、とうとう直接に「物自体」について語ってしまうようなあらゆる存在論的試みに対して、それらが指定する「実在論的前提」をことごとく無効化し、われわれのどこか彼岸に認識すべきなものかが実在していることを否定す

るような、Pippin のいく道がある。いわく、「超越論的条件から独立している世界それ自体」などありえず、それらは「概念 [= 世界] 自身の不完全さの帰結としてあるにすぎない」(Pippin 1989, 98) というわけである。彼はおよそいかなる「実在論的概念」をも前提しておらず、それゆえこれを超えようとするかぎりでの「反実在論」には与しない。彼が「超越論的一懐疑論的残余」(ibid., 93) として「物自体」を消極的に規定するばかりで、Stern がやったように、これを積極的に「実在論的概念 [残余]」とは規定しなかったということが、上のことを端的に証明している。それはわれわれの認知機構になにかしらの「制限」を設けるということを意味こそすれ、われわれの外になにかしらの実在があるということを必ずしも含意しない。彼にとって実在論的に「外的に存在している」というような意味でのいかなる主観と客観との対立も問題にはならなかったのであり、そのような対立は、「統覚 (概念 = 世界)」自身の不徹底さ、不完全さによるところのものであるから、統覚の「制限」とは、なにか彼岸に実在しているものへと届かない制限ではなく、たんに届かないと言われるだけでそれ以上なにも考察されえないという有限な思惟の制限なのである。

ここにおいて、ふたつの解釈における分水嶺は、カントの残した「物自体」概念に関する理解の相違にあるということが、少なくともわれわれに了解されることになる。ヘーゲル論理学が認識論的にも存在論的にも読めるという多彩な性格を帯びている以上、解釈の対立の根源に座する「物自体」の正確な理解こそ、われわれがこれを総合的に解釈するための必要条件であるにちがいない。

3. ヘーゲル論理学における「物自体」とはなんであったか

「物自体」の問題は、カント研究においてさえ解釈がわかれる難物である。本稿では、カントの「物自体」が実際どのような性格を有していたのかなどについて深入りすることはやめて、あくまでもヘーゲル解釈の内部で問題になっているということを顧慮し、ヘーゲルのテキストから読みとれる「物自体」についての理解を明らかにすることに専ら励みたい。

ヘーゲルによれば、「普遍的で必然的なもの」としてのカントの思惟がその客観性を失い、ふたたび主観的なものに陥ってしまうのは、「物自体であるものから、乗り越えられない深淵によって区別されているかぎり」(W8, 116) においてである。そのとき、「思惟の真なる客観性とは、思考はたんにわれわれの思考であるばかりでなく、同時に物や対象的なもの一般のそれ自体としてあること *Ansich* であるという客観性である」(ibid.) と言われ、カント哲学

はその意味での客観性を喪失するとされているため、「物自体は認識されえない」という批判によってカントの思惟が陥るのは、Pippin の解釈⁽⁴⁾にもあった、なにか彼岸に実在しているものへと届かないという一般的な意味での主観性ではなく、たんに届かないといわれるだけで、それ以上なにも考察されえないという有限な思惟の主観性であると考えられる。というのも、カントの理性批判は「泳ぎ方を習ってしまわないうちは、水のなかに入ろうとしない」有限な批判であって、「なるほど思惟の諸形式は吟味されずに使用されるべきではないが、しかしこの吟味はそれ自体すでに一個の認識活動なのである。したがって思惟諸形式のはたらきとその批判とは、その認識活動のうちでひとつにまとめられているはずである。それら思惟諸形式は即かつ対自的に考察されなければならない」(ibid., 114) からである。これが意味するところは、カント哲学における「物自体は認識されえない」という批判それ自体もまたすでに「一個の認識活動」の所産であって、こうして「物自体は認識されえない」というしかたで、カントにおいてそれがある意味ではすでに認識されてしまっている以上、カント自身はそれ以上考察することはなかったが、しかしそもそも彼がそのように物自体について語ることができるための条件までもが徹底的に吟味される「批判」こそ、思惟の諸形式のはたらきとその批判とがまさに一体となった、「即かつ対自的」な批判であるということであろう。そのとき、「それら[思惟諸形式]は対象であるとともに、対象そのものののはたらきである。それらはそれ自身でみずからを吟味するのであり、それら自身にあってみずからの限界を規定し、みずからの欠陥をはっきり示してみせるはずである。そして、これが弁証法としてまもなく特別に考察されることになるだろう思惟のはたらきなのである」(ibid.) とされる。

カントに即して言えば、超越論的統覚のもとに統一的に与えられた直観とカテゴリーが、アプリアリなものとして、つまり普遍的、必然的なものとしてありうるのは、その適用範囲が経験のうちに限られている場合のみである。つまり、カテゴリーの客観的妥当性は悟性がそれに関して「経験的使用のほかは為しえず、けっして超越論的使用を為しえない」(A238/B297) ときはじめて担保されるということ、すなわち、ひとたびカテゴリーの超越論的使用が為されたなら、カテゴリーはすぐさまその客観的妥当性を失わねばならないということである。ヘーゲルによるカント批判の核心は、思惟が真なる「客観性」を得るためには、たとえカテゴリーが超越論的に使用されたときであっても、その客観的妥当性が確保されていなければならないのではないか、ということである。それはけっしてカテゴリーが経験の外にある「物自体」

へと超越的に適用されるべきことを意味するわけではなく、むしろ現にカント自身が「物自体は認識されえない」というしかたで（「たとえ認識できなくても、少なくとも考えることはできなければならない」(BXXVI) というしかたで)、それに対してすでに思惟の諸規定であるカテゴリーを適用させているようにみえる以上、カテゴリーの超越論的使用に際してもその客観的妥当性が担保されていなければ、ここで「物自体」を想定することの妥当性、ひいては、それと「現象」との明確な区別にもとづいて経験の限界を画定しようとする、カントの理性批判の試み全体がそもそも客観的に成立しえないのではないか、という至極真つ当な批判哲学におけるヘーゲルの問題意識を表現しているのである。このとき、すでに「物自体」を無自覚的に認識してしまっているにもかかわらず、「物自体は認識されえない」という一言のもとにその研究を打ち止めにしてしまった、カントの批判哲学全体の存亡にも関わる有限な思惟の「主観性」が問題となっている。

ゆえに、ヘーゲルにしてみれば、カントにおいて「物自体が認識されえない」ということそれ自体が問題なのではなかった。たんに認識できないと言われるだけで、それ以上なんら媒介されず、考察されないことが不十分であったのだ。つまりヘーゲルが志向したのは、「認識できない物自体」を認識しようということではない。そうではなく、物自体が認識できないというしかたで、事実ある意味では認識されている（考えられている）という、この状態を論理的に解明したいということなのである。こうして、ヘーゲル自身の「客観的論理学」は、思惟の諸規定（カテゴリー）が「カントの表現によれば、物自体の規定でありうるかどうか、あるいはむしろ理性的なものの規定でありうるかどうか、またいかにしてそうでありうるか」ということを研究する「ほんとうの批判」である（W5, 61-2）ということになる。このとき、ヘーゲル論理学にあっては、Stern らが主張する「實在論的な存在者」や Pippin が問題にする「自己意識による客観的な認識」それ自体が念頭にあるのではなく、そもそもそれらが可能となるための「条件」が、彼独自の「媒介論⁽⁵⁾」にもとづいてあくまで論理的に考察されているのであって、「論理的条件」(Pippin 1989, 20) にしかすぎない「統覚」や、論理的要請にもとづく「物自体」についてのヘーゲルの言明が、「存在論的解釈」や「認識論的解釈」の、まったくそれ以前にあることは、ほとんど疑いえないようにすら思われる。

ヘーゲルによれば、問題の「物自体（その物のうちには精神、神も含まれる）」は「まうたくの抽象物、完全に空虚なもの、わずかに彼岸としてのみ規

定されるものであり、表象、感情、規定された思惟等々の否定物である」(W8, 120-1) とされる。それは真に客観的な思惟の抽象物なのであって、「存在、さもなくば無であるという以外のすべての規定と内実を欠いた」「端的な直接性」としての「純粹存在」(W5, 68) と同定されるべきものである。この「物自体」の次元において、はじめて「存在」が「無」になり、「無」が「存在」になるという、学の始まりにあるべき弁証法的運動が実現されることになる。まさにその次元は、「ある」ということや、「ない」ということが、「ある」や「ない」のまったくそれ以前にあって、それらが互いに融けあっているところの淵源である。これをいかに表現するかということが、ヘーゲル論理学全般にわたる問いであった。ヘーゲルは「存在一般」(ibid.) 以外のなものでもない「論理的始元」(ibid., 66) に関して、「天上、あるいは自然、あるいは精神、あるいはどこであっても、直接性と同様、媒介を含まないものはない」(ibid.) という確信にもとづき、これら無規定的なものに規定と内実を与え、それがなんであるのかを確かめようとしているのである。たとえば「物自体」であっても、「現象」がつねに他のものに条件づけられているように、これもまた「媒介」されているのであり、その性質を足掛かりに「論理学は、物自体とは実のところなんであるか、ほんとうに自体的にあるのはなにか、ということについての叙述である」(ibid., 130) と言われるように、ヘーゲル論理学全体の目的であるところの「物自体」の解明が目指されている。

そして真に客観的な思惟の抽象物としての「物自体」が特定の媒介関係にもとづいて、論理学の体系内に適切な位置を与えられることにより、カントにおいて「物自体」が想定されることの妥当性が担保され、カテゴリーの超越論的使用に際しての客観的妥当性が保証されることになる。『大論理学』「本質論」第二部現象、第一章実存において為される研究にその詳細がみえるが、これを詳述することは紙幅が許さない。簡単に述べると、カントによって「カテゴリーは物自体の規定ではない」とされ、「カテゴリー」と「物自体」という互いに外的であったものが、「物自体」と「外在的反省[カテゴリー]」の相互依存的な媒介関係によって、それらが互いに互いを規定しあうというしかたで、カテゴリーは「物自体の規定」であるということが明らかにされる。そしてそれは同時に「物自体自身のなかの契機」であって、そのようにして思惟の形式は同時に存在の形式でもあるとされることにより、おそらくここにおいて「経験一般を可能にする条件は、同時に経験の対象を可能にする条件であり、それゆえにアプリアリな総合判断において客観的妥当性をもつ」(A158/B197) というカント的観念論の教義が完成される。これによってカントが「物自体は認識されえない」と語ることが可能であるための条件が確かめられるのである。「物自体がなんであるか知られえないのはもつともである。というのも、なんであるかという問いは諸規定があげられることをもとめるからである。しかしそれについて規定をあげることをもとめら

れる物が同時に物自体なのであって、ちょうど規定のないことを意味しており、ゆえに、問いにおいて無思慮にも解答の不可能性が置かれているか、ひとはただ不合理な解答をするだけである」(W5, 130) というわけである。ヘーゲルはこの瞬間、「物自体」を含めたあらゆる事物の存在の根拠が究極的には、「真なるものは全体である」(W3, 24) という根本命題のもと、「普遍的な神的理念において」(W8, 123) あり、その意味で、「このような事物の把握も同様に観念論と呼ばれるべきであるが、しかし批判哲学のあの主観的観念論と区別して、絶対的観念論と呼ばれなければならない」(ibid.) と宣言する。

結語

ヘーゲルにとって「物自体」はそれ自体でなにか高尚なものなのではなくて、論理学、あるいは思考の要請した、たんなる学のはじまりにあるべき始元であって、論理学全般がその叙述をめざすところの終局であり、その全体である。それは感性的直観によっても知的直観によっても把握されるべきものではなく、そもそもなにかしら実在する「物」のようなものですらない。

「物自体」が認識されえないのは、われわれの「視力」が弱いからではなく、はじめから見るべきものが「なにもない」からである。「物自体そのものは一切の規定性を度外視した空虚な抽象物」(W6, 135) なのであり、このような空虚な概念になんらかの規定と内実を与えることこそが、ヘーゲル論理学の使命だったのである。

このような「物自体」を Pippin のように強いて「自己意識」の相のもとに論じようとしたり、Stern らのようにその知られざる「実在」を前提したりするところに、ヘーゲル論理学における非形而上学的解釈と形而上学的解釈とのふたつの道がひらかれる萌芽があるように思われる。ヘーゲル自身はそのような解釈がそもそも可能になるための、より根源的な「条件」を研究していたのであり、ふたつの解釈の対立は、まったくヘーゲル自身の「物自体」理解を曲解するところに拠っていると言ふべきである。

ヘーゲル論理学における「物自体」の位置づけを明らかにし、その解釈をめぐるヘーゲル研究上の対立を解消するという本稿の目的が、以上によって充実されたと考える。

注釈

(1) これら英語圏でのヘーゲル研究の動向は、川瀬(2021)、川瀬(2018)、川瀬(2016)、飯沼(2019)などに詳しい。

(2) 久保(2012)、49 頁も参照。

(3) 川瀬(2016)、193-4 頁も参照。

(4) Pippin は「統覚」のまったき「自発性」にもとづいて、「思惟の、純粹な直観の多様なものとの関係についての言表から、思惟の「自己規定」へと転換する」(Pippin 1989, 31) というヘーゲル像を思い描いている。そのため統覚とはどこまでも異質な「受容性」の権化である「物自体」を解消する

必要があり、ゆえに彼は感性と悟性との区別をはっきり否定し、すべてを悟性それ自体としての統覚の自発性へと回収したのである。思うに Pippin の解釈は、彼が「物自体」をわれわれの理解に対して設けられた「制限」であると理解している分にはまったく正当であった。しかし彼がカント的な感性と悟性との明確な区別を否定し、極度にヘーゲルを認識論へと接近させるとき、すでに彼は「物自体」を、その知られざる作用によって「統覚」になにかしら積極的な影響を及ぼすものとして理解してしまっているのである。このとき、Pippin の「物自体」は彼自身による「超越論的－懐疑論的残余」という消極的規定を超えて、むしろ彼の論敵である Stern の「实在論的概念」としての「物自体」へと急接近している。

(5) ヘーゲルの「媒介論」については、大田(2018)に詳しい。

文献

- 引用文中の [] は特別な断りのないかぎり、本稿筆者による補足、言い換えである。
- 引用文中の強調は、すべて原文のものである。
- 『純粹理性批判 (*Kritik der reinen Vernunft*)』からの引用に関して、慣例にならい、第一版(1781年)をA、第二版(1787年)をBと略記して頁数を示す。訳は筆者による。適宜、石川訳を参照した。
- 『エンチクロペディー(第三版)小論理学 (*Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I*)』(W8と略記)からの引用に関して、Suhrkamp 版ヘーゲル全集における原書頁数を示す。訳は筆者による。適宜、真下・宮本訳を参照した。
- 『大論理学 (*Wissenschaft der Logik*)』(W5, 6と略記)からの引用に関して、Suhrkamp 版ヘーゲル全集における頁数を示す。訳は筆者による。適宜、山口訳を参照した。
- 『精神現象学 (*Phänomenologie des Geistes*)』(W3と略記)からの引用に関して、Suhrkamp 版ヘーゲル全集における頁数を示す。訳は筆者による。

[外国語文献]

- Hegel, G. W. F. (1969), *Wissenschaft der Logik I*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
- Hegel, G. W. F. (1969), *Wissenschaft der Logik II*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
- Hegel, G. W. F. (1970), *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaft I*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.
- Hegel, G. W. F. (1970), *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp Verlag,

Frankfurt am Main.

Houlgate, Stephen (2008), Hegel's Logic, in: *The Cambridge Companion to Hegel and Nineteenth-Century Philosophy*, F.C.Beiser, pp.111-134

Kant, Immanuel (1956), *Kritik der reinen Vernunft*, Felix Meiner, Hamburg.

Pinkard, Terry P. (2002), *German philosophy 1760-1860: The Legacy of Idealism*, Cambridge University Press.

Pippin, Robert B. (1989), *Hegel's Idealism: The Satisfactions of Self-Consciousness*, Cambridge University Press.

Stern, Robert (2008), Hegel's Idealism, in: *The Cambridge Companion to Hegel and Nineteenth-Century Philosophy*, F.C.Beiser, pp.135-173

[日本語文献]

飯沼佑介 (2019), 「復活するヘーゲル形而上学」、『思想』、2019 年 1 月号、岩波書店、43-52 頁

石川文康訳 (2014), 『純粋理性批判 上・下』 筑摩書房

大田孝太郎 (2018), 『ヘーゲルの媒介思想』 溪水社

川瀬和也 (2016), 「ヘーゲル・ルネサンス——現代英語圏におけるヘーゲル解釈の展開」、『情況』、2016 年 6・7 月号、情況出版、178-196 頁

川瀬和也 (2018), 「ヘーゲルと英語圏の現代哲学」、『理想』、第 700 号、理想社、121-133 頁

川瀬和也 (2021), 『全体論と一元論——ヘーゲル哲学体系の核心——』 晃洋書房

久保陽一 (2012), 『ドイツ観念論とは何か カント、フィヒテ、ヘルダーリンを中心として』 筑摩書房

真下信一, 宮本十蔵訳 (1996), 『ヘーゲル 小論理学』 岩波書店

山口祐弘訳 (2012), 『ヘーゲル論理の学 第一巻 存在論』 作品社

山口祐弘訳 (2013), 『ヘーゲル論理の学 第二巻 本質論』 作品社